令和4年9月1日発行　毎月1回1日発行　ボランティア情報　昭和52年11月12日第三種郵便物承認

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

2022 9月号 no.544

福祉教育わたしの実践

大阪府　吹田市社会福祉協議会　地域福祉課　地域福祉第２係　係長　佐本（さもと） 一真（かずま）さん

【「自分たちの行動が地域を支える」を知る福祉教育へ】

吹田市社会福祉協議会（以下、市社協）では昨年度、同市の竹見台中学校１年生120名を対象に、半年間にわたる福祉教育「竹見台中学校区ええやんプロジェクト」を実施しました。きっかけは、先生からの「『知る』だけでなく行動することで、生徒が自分にも地域を支える力があると実感できる機会を」との相談でした。

それまで市社協では、体験とその振り返りといった体験型中心の福祉教育をサポートしてきました。佐本さんは、これらの経験を財産とする一方、今回の相談を「実践を伴う福祉教育へとステップアップするチャンスだと感じました」と振り返ります。福祉委員や地域包括支援センター（以下、包括）の職員、大学生ボランティア、先生と協議を重ね、10月にプログラムが開始しました。まずは、包括の職員から高齢者に関する話や、福祉委員から地域福祉活動についての話、視覚障害者による講話などを通じて気づきを得ました。そして、生徒全体で振り返り、12月の終わりには生徒の有志10人ほどが「今、自分たちにできること」をテーマに集まりました。そこで決まったのが高齢者のためのウォーキングマップ作りです。高齢者がコロナ禍で閉じこもりがちとの包括の職員の話がヒントとなりました。１月には実際に福祉委員や包括の協力を得て、１年生みんなで町を歩き、花壇や公園などの見所、交通量が少ない場所を確認し、マップに落とし込んでいきました。５月に完成したマップは、福祉委員の手により約300枚が高齢者のもとに届けられました。後日、課外授業中に高齢者から「とてもすてきなものを作ってくれてありがとう」と声をかけられた生徒たちは、はにかみながらも喜んでいたそうです。「大変そう」「かわいそう」で終わらず、主体的に行動できる力を育むことが、やさしい地域づくりにつながることを実感できた瞬間となりました。

佐本さんが福祉教育で大切にしているのは、「関わるすべての人に自分ごととして主体的に参画してもらうこと」です。そのために、寄せられたうれしい言葉をどんなに小さなものでも共有することを心がけています。そして「福祉教育に強い思いをもつ先生の存在の大きさも、改めて実感しました」と語ります。

これからも、福祉教育の魅力を伝え、自分ごととして実践できる地域づくりの担い手を増やす挑戦が続きます。

Contents

P.2▶ 特集 地域の課題解決を実現するための寄付や助成のあり方を考える ～共同募金と連携した地域のための資金づくり～
P.6▶ 実録ボランティアコーディネーター
P.7▶ 必見！ ファシリテーションを学ぼう！
P.8▶ 発災とともに駆けつけ、協働で支援し、被災者に寄り添う ｜ インフォメーション

ふれあいネットワーク 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

特集

地域の課題解決を実現するための寄付や助成のあり方を考える

～共同募金と連携した地域のための資金づくり～

地域のさまざまな課題解決に取り組むための資源として、寄付や助成の役割は大きいです。なかでも、毎年10月1日から翌年3月末まで実施される「赤い羽根共同募金」は、社協を含めた地域で活動する団体を支える財源となっています。今回の特集では、社協が共同募金と連携する事例のうち、寄付金の募集や助成方法等を工夫して、地域のための資金づくりに取り組む事例を紹介します。

事例1

共同募金の寄付募集方法と助成方法の工夫が、地域で活動する団体を元気に。市社協と県共募の協働が新たな取り組みにつながる

群馬県・前橋市社会福祉協議会

左から、星野さん、一柳さん

群馬県の中央部よりやや南に位置する前橋市は、県庁所在地として都市化や住宅団地の造成が進められ、全県人口の約17%にあたる33万人ほどが暮らしています。

前橋市社会福祉協議会（以下、市社協）では、9年ほど前から群馬県共同募金会（以下、県共募）と連携し、募金の新たな仕組みづくりに取り組んできました。その結果、戸別募金実績額を維持しながら、法人募金では3年でおよそ2倍の法人から募金を預かり、地域をよくする取り組みに活用しています。具体的にどのような工夫が功を奏したのか、市社協の一柳さんと県共募の星野さんにお話をうかがいました。

前橋市社会福祉協議会　総務課 総務係 主事　一柳（ひとつやなぎ） 大輔（だいすけ）さん

群馬県共同募金会　助成担当　星野（ほしの） 久子（ひさこ）さん

戸別募金の募金額を維持しながら、法人募金への働きかけを強める

共同募金は、戸別募金が募金額全体の7割以上を占めていますが、前橋市では2016年度からおおむね8割以上を維持し、戸別募金の募金額もキープしています。また、法人募金では、2021年度の募金件数が2018年度の約2倍に増加するなど、地域企業との関係を築く努力を続けています。

県共募の星野さんは、同市の戸別募金の特徴として、前橋市の自治会加入率の高さをあげます。「市民の約9割が自治会に加入しており、皆で連携する素地があります。そこに市社協が地区担当職員を配置して住民とともに地域づくりを進めているため、地域のたすけあい精神という面で、厚みのある市だと感じています」（星野さん）。

一方、戸別募金の状況について、市社協の一柳さんは「私が入職した2015年時点で、戸別募金は年間約10万円ずつ減り続けている傾向でした」と振り返ります。「これは、数年で市社協の一事業分ほどの予算や一団体分ほどの配分先が減っている状況です。危機感を覚えましたが、当時の私は共同募金に関する知識が十分ではなく、前任職員や星野さんに都度アドバイスを受けました」（一柳さん）。

県共募と市社協は情報交換を密に行い、例えば戸別募金は自治会長と連携し、募金用封筒に助成先を記載して紹介するなど、共同募金の役割と地域への助成実績を各世帯に直接案内することで住民の理解を得て、安定的に募金を預かることが可能になりました。

一方で、人口減少に伴い、法人募金にも力を入れる必要があります。一柳さんが取り組んだのは、企業向けに郵送で募金を呼びかけるダイレクトメール（以下、DM）の工夫でした。そこには民間企業で営業やマーケティングの仕事をした経験のある、一柳さんならではの戦略がありました。

共同募金支会用の名刺をオリジナルで作成。表が市社協職員用、裏が支会用

助成金情報

（社福）読売光と愛の事業団「がん患者在宅療養支援」（2022年10月31日締切）

人生の終末期に進行がんなどのために在宅で療養をしている患者さんやその家族の支援活動をしているボランティア団体を助成。
（詳細は「がん患者在宅療養支援」で検索）

DMの効果を上げる 社長宛の宛名と記名・押印

法人募金のDMをより効果的に行うため、一柳さんが初めに着手したのが、市に所在する企業リストの入手です。「営業にはCRM（顧客関係の管理）という手法があります。さまざまな分析をもとに顧客と良好な関係を築き、継続することですが、この手法は共同募金を依頼する法人にも活用できると思いました。そのためにも、企業リストの入手は必須でした」（一柳さん）。

県共募はこのねらいに共感し、データバンクから約1,000件の企業リストを購入し、支会（市区町村社協）と共有しました。一柳さんはリストを最新の情報に整えた後、まずはすべてのDMの宛名を社長宛に設定しました。これについて一柳さんは次のように強調します。「DMは、社長など意思決定者宛に送ることが大切です。『ご担当者様』宛などにすると、法人内で検討する時間が長くなり、結果的に話がまとまらないことがあるのです」。

さらに、文面の右上には県共募の会長と、前橋市支会長の記名・押印を添えました。「共同募金の代表者名を記載することで、DMに重みをもたせました。また、県共募の会長は前橋商工会議所の会頭でもあることから、市内の商工関係者の方々の反応につながると考えました」と一柳さんは語ります。

DMの効果を上げる 発送時期と寄付後の対応

次に、DMの発送時期を3月と9月に設定しました。これには、法人の決算期に合わせるという意図があります。「法人は、決算期に税務対策として、利益を宣伝広告費や採用費に使うケースが多いのですが、それらの費用の一部を共同募金への寄付につなげてもらうねらいです。DMには、共同募金への寄付が全額損金算入の対象になることもしっかり記載します」（一柳さん）。

また、DMには募金の使い道を具体的に記載することも大切だと一柳さんは指摘します。「多くの方は募金の用途を知りません。共同募金に共感してもらうためにも、ご提供いただいた募金がきちんと地元に還元されていることを示すのは最低限の取り組みです」（一柳さん）。

さらに、企業からの入金を確認した際の対応も重要です。一柳さんは入金を確認次第、すぐにお礼の電話をかけることにしています。その後、法人を訪問して感謝の気持ちを伝えたり、改めて募金の使い道を説明したりするほか、次のタイミングで送るDMに手書きでお礼を書き添えます。こうして個別に法人との関係を築くことが、継続的な募金につながっているのです。

星野さんは、こうした一柳さんの対応を次のように語ります。「社協職員の方々は忙しく、共同募金の取り組みが後回しになりがちです。しかし、一柳さんのように思いをもって取り組んでくださると、共同募金でつながった法人が、社協に対してもプラスの感情をもつことが多くなります」。

地域でがんばる団体を応援するために

一柳さんは、助成先についても新たな試みを行いました。これまでは社会福祉法人に助成し、備品の購入に充てられましたが、2018年からNPO法人や任意団体への助成を増やしたのです。

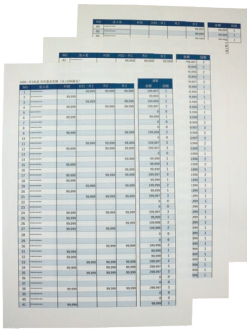
これには、2013年度から県共募による助成の仕組みを見直したことが影響しています。それまでは県共募が県内の団体に個別に助成していましたが、県内の支会に一括して配分し、使い道を支会に任せたのです。星野さんは「一柳さんは、地域でがんばっているのに助成が届いていなかった団体にも助成申請してもらえるよう、丁寧に支援してくださいました」と評価します。

一柳さんは、助成先やDMに関わる新しい仕組みについて、次のように語ります。「新しいことには組織の判断がしづらいものです。しかし、地域で地道にがんばっている団体を応援したい気持ちは、どの社協職員も同じです。そこで、『根回し』や『話の進め方』が大切になります。例えば、新規の団体に助成したい場合、団体の方から直接、社協役員に事業内容や思いを伝えてもらうことで組織決定しやすくなるなど、ケースごとに工夫しました」。

また、3月にDMを送ることについては、当時は共同募金の運動期間ではないことや、入金が翌年度の4月になることが課題として指摘されたそうです。しかし、星野さんは「もともと共同募金会は寄付を1年中受け付けることが可能です」と話し、一柳さんは「星野さんのアドバイスがあったおかげで実現できました」と語ります。

今回の事例は、一柳さんのデータを活用した行動力と、星野さんの柔軟性に加え、市社協と県共募の信頼関係、そして新たな課題に楽しく取り組む気持ちが鍵だったといえそうです。

企業へ送るDM。送付の際は振込用紙も同封



DM送付先法人一覧。年度ごとに寄付額を管理して、何年度にいくらの寄付をいただいたか可視化している

群馬県共同募金会が法人募金の際に使用している「赤い羽根サポーター」ステッカーの写真

助成金情報

（独）国立青少年教育振興機構「令和5年度子どもゆめ基金」（2022年11月29日締切）

未来を担う夢をもった子どもの健全育成を進めるため、民間団体が実施する自然のなかでのキャンプや科学実験教室などの体験活動、絵本の読み聞かせ会などの読書活動などへの助成。（詳細は「子どもゆめ基金」で検索）

事例2

子どもたちの思いやりで、町をよくする「ボランティア銀行」事業。子どもたちの成長を応援するテーマ募金も実施し、町全体で子どもたちの今と、未来を応援。

香川県・宇多津町社会福祉協議会

左から、小林さん、藤沢さん、今谷さん

瀬戸内海に面した香川県のほぼ中央に位置する宇多津町は、瀬戸大橋の開通を機に塩田跡地が整備され、新しく生まれ変わった町です。移住者が多いため、県内で最も出生率が高く、高齢化率が低い点が特徴的です。

宇多津町社会福祉協議会（以下、町社協）では、2008年度から小・中学生を対象とした「ボランティア銀行」事業に取り組んでいます。地元企業の勇心酒造株式会社の支援や、香川県共同募金会（以下、県共募）などとの連携により、長年継続している本事業についてお聞きしました。

宇多津町社会福祉協議会　総務グループ長 兼 地域福祉グループ長　藤沢（ふじさわ） 英明（ひであき）さん

香川県共同募金会　主任主事　今谷（いまたに） 明央（あきひろ）さん

勇心酒造株式会社　サポーター　小林（こばやし） 堅三（けんぞう）さん

子どもたちのボランティア活動を「ハート」で貯金する

町社協が2008年度に開始した「ボランティア銀行」事業は、子どもたちがボランティア活動をすると、お金の代わりに「ハート」をボランティア通帳に貯金でき、「1ハート＝1円」で換金して、福祉施設などに寄贈を行う仕組みです。子どもたちの思いやりの気持ちや、地域への愛着を育む事業として、町社協主体でスタートしました。

事業の対象は、町内の全小・中学生約1,600人です。全員がボランティア銀行に口座を開設し、ボランティア通帳にハートがたまるのを楽しみながら活動に取り組めるようになっています。

ハートを貯金できるボランティア活動は、学校でのあいさつ運動や清掃、通学中のゴミ拾いなど身近なものをはじめ、町社協によるイベントや駅前清掃、サロン活動の手伝い、ボランティア連絡協議会（以下、ボラ連）の団体による緑化運動やまちづくり活動、共同募金の募金活動など多様です。

個人で行ったボランティア活動は、1日につき1ハートから10ハートの範囲で貯金でき、町社協やボラ連の行事に参加した際のボランティア活動は、100ハートから500ハートの範囲で貯金できます。換金されたハートは、主に福祉施設への備品や防災グッズなどの寄贈、ボランティア団体の活動費などに活用されます。自分のために使うことはできず、町をよくするための財源として使われるのが大きな特徴です。

町社協の藤沢さんは、本事業の成果の一つとして、子どもたちによる働きかけで、2013年度にJR宇多津駅にエレベーターが設置された事例をあげます。ボランティア銀行事業は、小学校の福祉教育とも連携しており、そのなかで当時の小学4年生が町のバリアフリーについて調べ、エレベーターの設置を町長に要望したのです。その2年後にエレベーターが完成し、完成式には6年生になった小学生も招待されました。藤沢さんは「学校の先生が熱心だったことも、成功の大きな要因です」と当時を振り返ります。

本物の通帳のようなボランティア通帳に、ボランティアをするたびハートをためる

エレベーターの完成式。町長に提案した子どもたちも招待された

事業を盛り上げるさまざまな工夫とは

ボランティア銀行事業では、活動を盛り上げるためにさまざまな工夫をしています。例えば、毎年7月に町社協とボラ連の主催で開催するイベント「うたづっこふくしセミナー」です。コロナ禍により中止していましたが、今年は感染対策のもと、3年ぶりに開催しました。車いす体験や手話体験などの体験コーナーや、子どもたちによるボランティア体験発表会など、さまざまなプログラムが行われました。通常であれば、ハート貯金の活用方法を発表し、備品などを寄贈した団体を紹介する「ボランティア銀行贈呈式」も行わ

助成金情報

（公財）SOMPO環境財団「環境保全プロジェクト助成」（2022年10月31日締切）

環境問題に取組む NPO・NGOや任意団体の環境保全プロジェクトが、より充実したものとなるよう資金助成。

（詳細は「環境保全プロジェクト助成」で検索）

れますが、感染対策のため実施を見送りました。一方、例年通り行った主要なプログラムに「善行活動生徒表彰式」があります。これは、ボランティア活動に特に熱心に取り組んだ子どもを表彰するもので、中学生の表彰は高校受験でプラス要素にもできる仕組みになっています。

県共募との連携による テーマ募金への取り組み

子どもたちが活発なボランティア活動に取り組む過程で、藤沢さんは「子どもたちの活動を地域で応援する仕組みをつくりたい」と考えるようになりました。そのためには、地域との関わりを一層増やし、継続的な地域からの応援の一環として、共同募金が不可欠でした。当時から、町の北部には移住者向けの新興住宅やマンションが多く、町全体の自治体加入率が低いことから、戸別募金の実績額が課題でした。そこで県共募は、戸別募金に代わる募金方法として、2013年に始まった「テーマ募金」の導入を町社協に提案しました。県共募の今谷さんは、「子どもたちの成長を応援するというテーマがあることで、町の小・中学校に通う子どもたちの保護者も、募金に関心をもってもらえることを期待しました」と振り返ります。

こうした県共募の提案もあり、町社協では、2013年度からテーマ募金を継続しています。「宇多津町内小・中学校応援プロジェクト募金」と題し、保護者や地域の団体による実行委員会が中心となって活動しています。集まった募金は、子どもたちの自転車用の反射シート、小学校の部活動のユニホームや衣装、中学校での講演会、ボランティア銀行事業の財源などに活用されています。

財源の確保のため、 地元企業の協力を仰ぐ

テーマ募金の導入による地域の応援を獲得する試みは、ボランティア銀行事業を運営するうえでの課題にも、プラスの影響を与えていきました。事業を立ち上げた2008年度当初から、年度末に集計されたハートは、町社協の自主財源で換金していました。しかし、子どもたちのボランティア活動が活発になるにつれ、ハート数が年々増大したことで、町社協の自主財源からまかなうのが厳しい状況になりました。

そこで2016年に、藤沢さんは以前からつながりのある、町内に本社を置く勇心酒造株式会社（以下、勇心酒造）に相談をしました。すると、子どもたちの育成につながる活動に共感した同社から、社会貢献の一環として、毎年寄付を受けられることになったのです。

勇心酒造の小林さんは次のように語ります。「弊社は1854年の創業以来、宇多津町の方たちに大変お世話になりました。その恩返しとして、宇多津町のために何かできないかと考えていたのです。子どもたちのボランティア活動を支援することは、宇多津町のよりよい将来につながると思っています」。

こうして町社協では、毎年、子どもたちが貯金したハートに見合う金額を同社に全額寄付してもらっています。さらに、本物の通帳のようなボランティア通帳の作成代も寄付してもらうなど、町社協にとって心強い支援者となっています。

継続的な活動のために 必要なこととは

ボランティア銀行事業は、立ち上げから今年で14年になります。藤沢さんは、長年継続できた要因として勇心酒造による財政面の支援に加え、学校との密な連携をあげます。「福祉教育や行事のなかで、ハートをためるボランティア活動を取り入れてもらっています。先生が異動しても授業や行事を引き継いでもらっていることが、事業の継続につながっています」（藤沢さん）。

また、今谷さんは活動に参加した子どものなかにはすでに成人している人もいることに触れ、次のように語ります。「子どもの時にボランティア活動や共同募金に触れる機会を提供することで、大人になった時、今度は自分の子ども世代にその経験を伝えてもらえるようになるといいなと思います」。

一方、小林さんは企業側の視点から「藤沢さんは活動ごとに充実した報告書を作成されるので、弊社としても十分な信頼につながっており、支援を続ける要因の一つになっています」と語ります。

今後も、子どもたちがボランティア銀行事業を通して地域のために活動し、地域はテーマ募金により住民総ぐるみで子どもたちの成長を育みながら、町社協や県共募、地元企業や学校、ボラ連など、皆で一丸となり、子どもの今を、そして未来を応援していきます。

テーマ募金により集まった募金で作成した、自転車用の交通安全ステッカー

ボランティア銀行事業に寄付をする勇心酒造（株）と町社協との契約調印式

募金を呼びかけながら、町を歩く子どもたち

助成金情報

（株）日本郵便株式会社「2023年度日本郵便年賀寄付金配分団体公募」（2022年11月4日締切）

社会貢献事業に対する 2023 年度日本郵便年賀寄付金の配分団体を公募。
（詳細は「日本郵便年賀寄付金　公募」で検索）

実録 ボランティアコーディネーター

ボランティアセンターのコーディネーターは、今、どのようにボランティアの皆さんや地域と連携・協働し、まちを暮らしやすくする活動に取り組んでいるのでしょうか。
ボランティアセンターを支える「人」に焦点を当て、ボランティアセンターの役割を考えます。

第6回 小さなことを日々積み重ね 信頼されるコーディネートを

北海道　三笠市社会福祉協議会

ボランティアコーディネーター
菅谷（すがや） 唯喜子（ゆきこ）さん

社協紹介

三笠市：人口7,853人（2022.7.1）
北海道中部に位置し、炭鉱の町として栄えた歴史をもつ。
三笠市社会福祉協議会（以下、市社協）では、地域の高齢化に対応するため「支え愛でつながろう」をテーマにした生活支援体制整備事業などを進めています。

Q ボランティアセンターに配属されてどのくらいですか？

A ボランティアコーディネーターとして働き始めて8年目、4年前から常勤で生活支援コーディネーターも兼務しています。それ以前から関わっていた「三笠手話の会」の活動の関係で市社協にはよく出入りしていて、その縁もあってこの仕事に就きました。

Q 三笠市と市社協の特徴を教えてください

A 炭鉱住宅での生活経験者が多いからか、炭鉱が閉山した今もたすけあい精神が強い土地です。過疎化で町も小さくなり、65歳以上の高齢者が約半数となりましたが、皆さん元気でサロン活動も活発です。市社協も規模が小さく、職員は13人です。何でも皆で相談しつつ地域密着を意識して活動しており、親しみやすさや相談のしやすさには自信があります。

Q 取り組んでいる事業と印象的な出来事は？

A ボランティアセンターでは昨年から「ちょこっとお手伝いサービス」を始めました。たすけあい精神が残る土地とはいえ、やはりなかなかたすけを求められない人もいます。そんな人たちの、生活での困りごとを地域でお手伝いする有償の活動です。10分50円という破格のお値段ですが（笑）、「ストーブのタイマーの設定がわからない」というトラブルでも業者を呼べば3,000円かかります。できないことが増える高齢者のためにボランティアの方々が奮闘してくれています。

また一昨年、市役所からコロナ禍で不足した小中高生向けマスクの作製依頼を受けた際には、55人のボランティアが2週間で計821枚を仕上げてくれました。三笠市のボランティアの気持ちの熱さや底力を改めて実感しました。

市役所に、小中高生向けに作成したマスクを届けるボランティアの方々

Q コーディネートで心がけていることを教えてください

A 私は小さなことを積み重ねていくのが好きで、ボランティアと利用者が互いに楽しみながら活動するにはどうすべきか考えながら、少しずつ業務を進めています。私自身が長年ボランティアで関わってきた手話でも同じですが、やはり活動の相手と一緒に皆で笑いあう時にこそやりがいを感じますから。また、相談には“きちんと返す”ことを心がけています。話をきちんと聞いたうえでできない時はできないと答え、中途半端にしない、曖昧なことは言わない、もちろんうそはつかない。信頼されるコーディネートにはそうした点が大事だと思います。

Q コロナ禍で試行錯誤している全国の社協仲間にメッセージを！

A 三笠市の住民は隣接する岩見沢市に、買い物や通院などで向かうことが多いため、地元では感染者が少なくても、岩見沢市で増えると日常に大きな支障を生じました。ボランティアについてもコロナ禍で思うように活動できず、士気が下がってやめてしまう人も出てきています。おそらく他の地域でも同様で、めげてしまいそうな方も多いのではないかと思います。私はコーディネーターとして大事にしている「笑顔とあいさつ」を忘れずに、この苦境に少しでも楽しみを見つけながら乗り切ろうと思いますので、皆さんも一緒に頑張りましょう！

菅谷さんへのひとこと

菅谷さんは、ボランティアコーディネーターとしても、「三笠手話の会」会長としても活躍されており、その姿勢は見習うところばかりです。これからも「笑顔とあいさつ」を大切に、ますますのご活躍を応援しております。

北海道社会福祉協議会
地域福祉部 地域福祉課　主事
一戸 航瓶さん

イベント・講座情報

（特非）日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）「市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会」
（2022年12月17日～18日開催）
Zoomを活用したオンライン型と東京・大阪・京都を会場とした対面型、2種類の分科会を実施予定。
（詳細は「JVCA 研修集会 2022」で検索）

必見！ファシリテーションを学ぼう！

話し合いの場づくりに重要な役割を担うファシリテーションのノウハウを、1年間かけて学びます。社協職員やボランティアコーディネーターのみなさん、一緒に学び、実践に活かしていきましょう。

ファシリテーションの力が、地域を、ボランティアを元気にする！

第6回 始める前にする大切なこと その3 の巻

子どもの頃、ボランティア活動を通してワークショップと出合う。人事労務コンサルタント会社を経て独立。現在、ひとりひとりが「尊重され、存在できる」場づくりをめざして福祉をはじめさまざまな分野で会議やワークショップを進行。また、その手法と考え方「ファシリテーション」を伝える研修を企画・実施している。

特定非営利活動法人
日本ファシリテーション協会
フェロー **鈴木 まり子**さん

1 プログラムデザイン

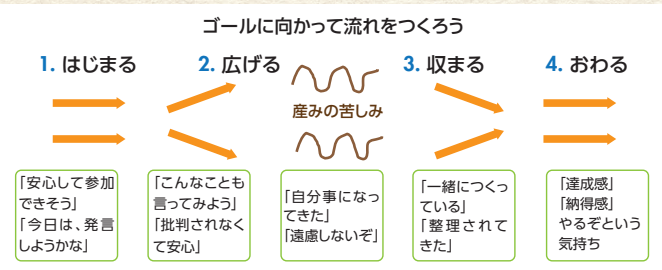
皆さんのいつもの会議はプログラムデザインされていますか？時間配分はされていますか？ただ議題が並んでいるだけではありませんか？会議・ワークショップ・講座・打ち合わせなどファシリテーションを活用する場には、必ず時間の制限があります。それは15分間だったり、半日だったり、1泊2日だったりしますが、始まりがあれば終わりがあります。使うことができる時間の中で、ゴールに向かって創造的な流れをつくるのがプログラムデザインです。始める前に、参加者の主体性を促すプログラムを事前にデザインすることはファシリテーターの重要な役割のひとつです。ここでは、プログラムデザインのコツをご紹介します。

2 創造的な流れをつくる

プログラムをデザインするときには、ゴールが明確になっていることが大事です。ゴールが決まったら、そのゴールに向かって、順番に流れを考えていきます。まずは、決定事項を確認します。例えば、始める時の「開会挨拶」「オリエンテーション」、終わるときには「閉会挨拶」「アンケート記入」などがあります。

次に残った時間をデザインしていきます。創造的な流れの例として「はじまる→広げる→収まる→おわる」という流れがあります。会議のスタートでは参加者が「今日は安心して参加できそう」「今日は発言しようかな」と思ってもらうようにします。そして、アイデアを広げるときには「こんなことも言ってみよう」「今日は批判されなくて安心」と思ってもらうように進めます。さらに、産み出す前の混沌とした状況から「自分事になってきた」「今日は遠慮しないぞ」という空気をつくります。そのために参加者が思い切り議論ができる時間を確保します。結果、参加者自ら収まって「みんなと一緒につくっている」「整理されてきた」と感じるのです。最後に、終わりが肝心。「達成感がある」「納得している」そして、やるぞという気持ちが生まれるようにデザインします。特に、議論を尽くす中での混沌とした時間は貴重です。そのためには、「広げる」と「収まる」の間にある創造的な議論の時間をしっかり確保することが重要です。

こうして大まかなデザインができたら、時間配分をしていきます。そのときのコツは、詰め込まないことです。参加者が熟考する時間や対話が深まる時間、議論が白熱する時間は想定できているでしょうか。参加者の立場に立って見直してみましょう。そして、本番中には計画していた時間配分と実際にかかった時間の差を記録しておきましょう。それを重ねていく中で、誤差が少なくなっていきます。まずは身近な会議や打ち合わせから始めてみましょう。次号からは創造的な流れのプログラムデザインをもとに、本番でファシリテーターが活用できるスキルとマインドをご紹介していきます。



■テーマ「パパママの視点の入った防災訓練メニューを考えよう」

60分間	プログラム（進行表）
3分間	①進め方を説明しよう【目的～お約束まで参加者に伝えよう】 ここから 【目的】地域ですぐに実践できそうなパパママの視点の入った訓練メニューを考える 【ゴール】訓練メニューの話し合いを通して、本当に地域でやってみようと思う 【進行表】・自己紹介 ・話し合い ・感想をひとこと 【役割】進行役〇〇、板書係〇〇です みなさん：やってみたくなる訓練メニューを考える人 【心がけてほしいこと】全員が話せるように心がけましょう 【お約束】携帯はマナーモードでお願いします ここまで説明
7分間	②自己紹介をしてもらおう 「地域・お名前」「防災で普段意識していること」1人1分以内で。 ★長い方には終わってもらうようにお願いする。早く終われば次の進行に入る。
5分間	③地域での訓練メニューを考える上でのポイントをリーダーに聞く ★時間管理をしっかりと。時間を過ぎたら勇気を持って終わってもらおう 受講生からの質問も受けよう。
15分間	④訓練メニューを考える ・何したい？・パパママの視点はどこに？ ・リーダーを含め、全員に発言してもらいましょう。先に、2分間ぐらいペアで話し合ってもらって、それを紹介してもらってもOK。早く終われば次へ。
20分間	⑤共有した内容をもとに、話し合う ・できそうな訓練を実践するためにより具体化する ・板書係は発言をしっかり書くこと。ここは次へ行かずに時間をしっかりとろう。
10分間	⑥話し合った感想を全員一言で言ってもらおう ・「お名前」「話し合っての感想」など。 ★全員が話せるように時間管理をしっかりと。

★時間はあくまで目安です。参加者の様子を見ながら、時間管理をしてください。

★プログラムデザイン：鈴木まり子

書籍紹介

『月刊福祉』2022年10月号（全社協出版部）価格1,068円（本体971円）

特集は、「農福連携―持続可能な地域をつくる」。農業の担い手対策と障害者の就労という枠を超えた取り組みの多様性を紹介し、福祉分野が他分野と連携することで地域課題にアプローチする意義や今後の可能性について考える。（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）

ボランティア情報
2022 no 544
全国ボランティア・市民活動振興センター
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

発災とともに駆けつけ、協働で支援し、被災者に寄り添う
～災害ボランティア・NPOの先達紹介～

各地で災害が発災した際、いち早く被災地に駆けつけ、災害ボランティアセンターや社協と連携・協働を進め、被災者への支援を行うボランティア・NPOの活動を紹介します。

第6回

天理教災害救援ひのきしん隊（略称、災救隊）

https://www.tenrikyo.or.jp/jpn/saikyu/

本部　奈良県天理市

奈良県天理市に本部隊が、47都道府県には教区隊が常設されています。各教区隊の隊長を中心にそれぞれの地域で活動し、状況に応じて本部隊と連携して災害救援にあたっています。

“有事”の際には迅速に被災地へ駆けつける体制 －全国の仲間が応援に駆け付ける－

天理教災害救援ひのきしん隊（以下、ひのきしん隊）は、本部隊と全国の都道府県を単位とする47の教区に常設され、総隊員数約4,000名が活躍する全国規模の災害救援組織です。ひのきしん隊は、1971年に正式に発足し、全国各地で災害救援活動を行ってきました。1995年の阪神・淡路大震災では延べ1.3万人が活動し、2011年の東日本大震災では延べ3万人が活動をするなど、メンバーが日本全国から駆けつけられることを強みにしています。

最近の活動では、2022（令和4）年8月3日からの大雨では、新潟教区隊が駆けつけ、新潟県社会福祉協議会、村上市・関川村社会福祉協議会と協力し、村上市坂町での給水活動や、関川村災害ボランティアセンターと連携して水没品の搬出や泥かきなどを行い、その後、本部隊（新潟、群馬、長野、埼玉教区隊を含む）の出動となり、延べ184名が村上市・関川村の復旧にあたっています。他にも、青森・石川・福井教区隊が、地元社協などと連携してこの大雨による水害の救援活動を行っています。

また、2020（令和2）年7月豪雨では熊本教区隊が球磨村社会福祉協議会と協力し、本部隊も協力要請を受け、地域の神社の敷地内の災害ゴミの搬出や建物の解体など活動に尽力しました。

被災地に迷惑をかけない“自己完結型”の救援活動を展開

ひのきしん隊は、災害発生時には社協や自治体などと連携しながら、被災地に迷惑をかけない“自己完結型”の救援活動を展開することをめざしこれまで活動してきました。例えば、トラックや重機などを調達して被災地に赴き、必要な設備を使用して復旧や専門的な救援活動の実施や、隊員の「衣食住」に関わる生活資材すべてを自らで準備することです。被災地では、被災した人々の身になって丁寧な作業を心がけ、地震の際の倒壊家屋の解体・撤去および後片付けや、降り積もった火山灰の除去、海岸に付着した重油の撤去・清掃作業、水害によってたまった土砂や流木の搬出や清掃作業などを行っています。

また、平時には、いざという時に備えた定期的な訓練を実施し、災害救援に必要な知識や技術を身に付けるほか、隊として統率のとれた行動ができるよう、規律訓練も行っています。

● 令和4年8月3日からの大雨の災害救援活動（天理教新潟教区隊ホームページより）

床下にもぐっての泥出し作業

● 令和2年7月豪雨の災害救援活動（天理教熊本教区隊ホームページより）

球磨村千寿園（高齢者福祉施設）で屋内被災物搬出や汚泥撤去

最近の主な災害対応	令和4年7月14日からの大雨（2022年）、令和4年8月3日からの大雨（2022年）、令和4年台風8号による災害（2022年）、令和3年7月豪雨（2021年）、令和3年8月豪雨（2021年）、令和2年7月豪雨（2020年）ほか

インフォメーション

「ボランティア全国フォーラム 2022」を、会場参加により開催します！
「広がれボランティアの輪」連絡会議

ボランティア・市民活動を進める皆さんの研究協議の場「ボランティア全国フォーラム2022」を開催します。今年度は感染防止対策に配慮しつつ、会場参加により開催します。ぜひご参加ください。

【日程】2022年11月18日（金）・19日（土）
【会場】第1日 東京ウィメンズプラザ（東京都渋谷区）
第2日 全社協会議室（東京都千代田区）

詳細・申込は、
9月末に「広がれボランティアの輪」連絡会議ホームページでご案内します。

広がれボランティア で検索
https://www.hirogare.net/

〒100-8980 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル TEL.03-3581-4656 FAX.03-3581-7858
E-mail vc00000@shakyo.or.jp URL https://www.zcwvc.net/
発行人●松島 紀由 編集人●高橋 良太 制作●株式会社トライ 定価●¥110（税込）※購読料は会費に含む